自閉症スペクトラムがある中学生の社会科と美術科における事例

中学校自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する生徒の交流学級における社会科と美術科の交流及び共同学習

〇概要

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学２年生のＡ生徒の事例である。Ａ生徒は、見通しがもてないと学習に集中できない等の困難さがあるため、Ａ生徒に分かりやすいように視覚的に情報を提示するよう工夫している。Ａ生徒は、美術と社会の教科を、交流学級で学習している。交流及び共同学習を始めた当初は、他の生徒の文房具等を許可なく触る様子が見られたり、独り言を言ったり、無断で離席したりすることがあったが、文字を書いて注意を促したり、授業の流れを図示して提示したりすることで、徐々にＡ生徒の行動が落ち着く様子がみられてきた。また、交流及び共同学習を行うことで、教科担任や他の生徒も、Ａ生徒に対して配慮や工夫ができるようになってきている。

１．対象生徒について

Ａ生徒　：Ａ生徒は自閉症スペクトラムの診断がある、中学２年生である。アニメ作品のキャラクターが大好きで、その行動を真似る、落ちている物や他人の物を自分の物として扱い、他の生徒とトラブルになる等の様子が見られた。場面に不適切な言葉遣いや態度でコミュニケーションを取ろうとすることがあるが、成長に伴い少しずつそれらの行動が減ってきている。休み時間は、主にイラストを描いて過ごしている。テレビからの情報をたくさん得ていて、ニュースの会見の様子を見て受け答えの真似をしたり、お笑い番組から芸人の真似をしたりして周囲を笑わせることもある。

自閉症・情緒障害特別支援学級での学習の様子については、数学では、四則計算はもとより、小数・分数の計算もよくできている。国語では、文章の読解力があり、音読も得意である。また、音楽では、音感がよく、ハーモニーパートを正しい音程で歌うこともできる。美術では、独創的な作品を創ることができた。粗大運動や微細運動に大きな課題は見られない。しかし、丁寧に文字を書くが、非常に時間を要する、口頭による指示だけでは指示内容を捉えにくい等の問題もあり、視覚的に情報を提示することで理解が深まる様子が見られた。

２．活動のねらい

Ａ生徒から通常の学級での交流及び共同学習の希望があり、特別支援学級担任と保護者との面談で、交流及び共同学習を行うことについて合意形成がなされた。保護者からは、Ａ生徒が絵を描くことが好きであるため、美術で、交流及び共同学習を行い

たいとの申出があった。それに対して特別支援学級担任は、美術の授業が週に１度しかなく、他の教科でも交流及び共同学習を実施することがＡ生徒の希望に添うのではないかと考え、社会的事象についての知識が増やせる社会科でも行うことを勧めた。学級担任、保護者、本人との面談による合意形成の後、管理職、交流学級担任教員、教科担当教員と共通理解を図り、社会科と美術科で交流及び共同学習を行うことを確認した。

３．事前の取組と配慮

自閉症・情緒障害特別支援学級では、将来、生徒が自立して社会生活ができる力を育成することを目標に、社会的スキルやコミュニケーションスキルの獲得と向上を目指し指導を行っている。Ａ生徒がこれらのスキルを、交流学級においても活用して、交流及び共同学習で円滑に学べるように促した。

Ａ生徒は、文字を丁寧に書くために書字に多くの時間を要する、口頭による指示だけでは理解が難しい、といった様子が見られた。そこで、交流及び共同学習では、Ａ生徒の座席配置を配慮し、一人席にせず、他の生徒と机を並べることにより、Ａ生徒が授業中に分からなくなったときには、隣席の生徒から支援を受けられるようにしている。

プリントの穴埋めでは、あらかじめ正解が記入されているプリントを用意することで、教科書から言葉を探す時間を短縮させる等の配慮をしている。Ａ生徒は口頭による指示だけでは理解が難しいため、作業場面では、スケッチブック等に文字で指示を書いて提示したり、授業の流れをホワイトボードで示したりすることで、授業の流れの見通しがもてるようにしている。

４．活動の様子と成果

Ａ生徒が見通しをもてるような工夫を行う事で、自分自身で交流学級に移動したり、授業の準備を行うことができるようになったりしてきた。通常の学級での授業は、Ａ生徒にとって学びの場になっていると考えている。教科書の文章を読み、プリントに言葉を探して埋めることもできるようになった。通常の学級に在籍する生徒のプリントやノートを見せてもらう等のやり取りも多くなり、会話を楽しむ場面も見られるようになった。

社会科では、Ａ生徒の理解の程度を考慮した基礎的・基本的な内容の確実な習得を目指すため、Ａ生徒が自力でできる量の課題を提示するよう配慮をしている。課題への取組の後は、模範解答を用いて確認させている。また、Ａ生徒は、視覚優位の傾向があるため、教科書の図表をスクリーンに大きく投影し、理解しやすいようにしている。美術科では、丁寧に作業するあまり時間がかかってしまうＡ生徒の特性に配慮し、Ａ生徒が納得したところで作業を終了するようにしている。

このように、Ａ生徒が交流及び共同学習を行う機会が増えたことにより、他の生徒たちのＡ生徒に対する理解が深まり、寛容な態度で接することができるようになってきた。自然な雰囲気でＡ生徒を見守り、必要に応じて援助や協力する姿も見られる。

また、Ａ生徒は、交流及び共同学習の一環として、運動会や合唱祭等の行事を通じて通常の学級の生徒と共に活動してきた。通常の学級の生徒がＡ生徒の障害特性を理解して、対応しているため、Ａ生徒は安心して交流学級の中で過ごすことができている。このため、休み時間は、支援員等の付き添いが無くても、Ａ生徒は１人で他の生徒と交流することができている。

各教科担任は、Ａ生徒への配慮を考えて自身の授業を見直し、視覚的に分かりやすい授業づくりを行うようになった。Ａ生徒の存在が、授業づくりに良い影響を与えていると考える。教科担任の発問の仕方にも工夫がみられるようになり、Ａ生徒が発言する場面も増えている。また、視覚的に分かりやすい情報提示の工夫や指示を行うことで、Ｂ中学校に書画カメラやプロジェクターの導入が図られ、Ａ生徒の理解を助けている。さらに、記入欄の大きさや配置、文字の大きさ等、ワークシートの体裁が工夫されるようになり、通常の学級の生徒にとっても使いやすいワークシートになっている。

５．事後の取組、今後の課題

交流及び共同学習において、Ａ生徒が通常学級の生徒とトラブルを起こしたとき、その都度、担任が指導するようにしているが、働き掛けが頻繁になることで、Ａ生徒と他の生徒との関わりを妨げたり、Ａ生徒が自信をなくしたりしないように注意する必要がある。このため、担任がＡ生徒にどのように対応することが、Ａ生徒や周囲の生徒にとって最善の方策であるのか、今後も特別支援学級担任と交流学級担任、教科担任と連携を密にして検討する必要がある。